

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520378

研究課題名（和文） コミュニケーション行動制御慣用表現の日独対照研究

研究課題名（英文） A Contrastive Study of Controlling Routine Formulas for Communicative Behavior in Japanese and German

研究代表者

西嶋 義憲（NISHIJIMA YOSHINORI）

金沢大学・経済学経営学系・教授

研究者番号：20242539

研究成果の概要（和文）：対応する日本語表現とドイツ語表現との間に表現視点（視座）の違いがあること指摘されるが、それを例証するために文芸作品の原文とその翻訳を比較するという方法がとられることが多い。しかし、比較の際、翻訳を用いると、たしかに同一事態を表わす表現どうしを対比させることができるが、起点言語の表現方法による影響や訳者による個人差を排除できないという点で問題がないとはいえない。本研究においては、対応する日常的な社会化場面において使用される同一機能を果たすコミュニケーション行動制御慣用表現を利用することにより、表現視点の違いをより客観的な形式で比較し、その差を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In general, it is claimed that there is a difference in perspective between corresponding Japanese and German sentences. The data employed in such a comparison are often cited from a literary text and its translation. Therefore, they have methodological problems because translation is done individually and subjectively. In the present study, Japanese and German sentences were compared in more objective manner by using routine formulas which are used in corresponding situations in socialization processes between Japanese and German society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：慣用表現、日本語、ドイツ語、コミュニケーション、定型表現、視点、評価概念、対人行動

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象は、日独のコミュニケーション

ン行動における協調のあり方の違いにある。

そのような協調行動を分析するアプローチ

の一つに、コミュニケーション行動評価概念 (Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens) の分析がある。コミュニケーション行動評価概念とは、たとえば日本語では「丁寧な」「親切な」「生意気な」、ドイツ語では“höflich”, “freundlich”, “überheblich” といった、コミュニケーションにおいて対話相手や自分自身の行動をメタレベルから肯定的にもしくは否定的に評価する概念である。これらの概念は、それが使用される社会で「当たり前」とされるコミュニケーション行動を説明するものである。こういった概念を収集し、分析することにより、当該社会ごとの協調のあり方を明らかにすることができる。コミュニケーション行動評価概念を言語間で対照した研究として、日米の比較については Ide et al. (1992) がある。日独の比較については、Marui et al. (1996) が知られている。研究代表者は、1995 年以降、コミュニケーション行動評価概念を用いて日独の協調のあり方の異同を研究してきた。

ところで、このような協調様式や規範はどのようにして獲得されるのだろうか。この疑問に対しては、つぎのように考えることができるだろう。このような協調のあり方の習得には、社会化の過程において適切な行動ができるように繰り返し使用される慣用化された表現が関与している可能性がある。そこで、ある特定の場面において子供が問題となるような事態を引き起こした場合、それを通常にもどすために慣用的に使用される典型的な言語表現があると仮定する。このような慣習化された表現を本研究ではコミュニケーション行動制御慣用表現 (Kontrollierende Routineformeln kommunikativen Verhaltens) と呼ぶことにする。このような表現を収集して類型化すると、その類型化された表現形式は、「当たり前」とされるコミ

ュニケーション行動の類型に対して一定の対応関係が認められると推測できる。そして、そのような表現は、当該社会のコミュニケーションにおける一種の鋳型として機能し、それが使用される社会の対人行動において何に注目もしくは配慮して行動すべきなのかについて示唆を与え、それが当たり前とされる協調様式の獲得に関与していると仮定する。

このような仮定のもと、本研究の準備段階として、つぎのようなパイロット調査を行った。まず、日本とドイツで共通して起こりうる問題状況 (病院場面とけんか場面) を設定し、それを解消するために典型的に使用されるとみなされる慣用的言語表現を収集した (幼稚園児の保護者へのアンケート調査)。上記の調査によって収集された表現を言語学的に対照分析することにより、両言語の表現形式と語彙項目の類型化を試みた。その結果、統語論的にいえば、主に 3 種の発話タイプが認められた: 「指示」タイプ (「静かにしなさい」、「Sei bitte still」)・「促し」タイプ (「静かにしよう」、「Lass uns etwas spielen」)・「提案」タイプ (「かわりばんこするといいよ」)。日本語では場面によって表現の使い分けがなされているが、全体的にみると「促し」タイプの表現が比較的多く、病院場面では約 30%、けんか場面では 46%であった。また、けんか場面では「提案」タイプも選択される。他方、ドイツ語は場面にかかわらず、ほとんどが一貫して「指示」タイプの表現を選択している (両場面とも 90%以上)。これは、日本人はドイツ人と異なり、相手と対立的にコミュニケーションするより、相手を含めた統合的な視点からコミュニケーションを行う傾向にあることを示唆するものである (2006 年 10 月に金沢大学で開催された第 9 回日独社会科学学会で口頭発表。その後、論文にま

とめ、同学会発行の論文集に掲載)。日本とドイツとのコミュニケーションや言語相互行為の対照研究で、それぞれに特徴的な協調傾向として、統合と対立があることが様々な研究ですでに報告されてきている。このパイロット調査は、日本とドイツを特徴づける統合と対立という対比傾向が、慣用的言語表現にも認められるということを示唆し、この傾向を確認するものと位置付けることができる。

2. 研究の目的

上記の研究背景および予備調査をふまえ、本研究では、調査対象をより広範囲に広げ、異なる年齢層の子どもに対するコミュニケーション行動制御慣用表現を調査することにより、予備調査の結果から引き出された統合と対立という傾向的差異の一般的妥当性を検証しようというものである。さらに表現形成の際の視座という観点から、この差異は、共感と対立という対立概念によってより適切に説明できることを明らかにする。

3. 研究の方法

まず、日本とドイツの対応する具体的な社会化場面において使用される言語表現を主にアンケート調査により収集し、それを分析する。そして、その表現形式と使用語彙の類型化を行った上で、両言語表現形式の相違点と類似点を明らかにする。つぎに、両言語の言語表現形式の類型的差異が、同一場面での両社会の協調行動および配慮行動の類型的な違いと対応しているかどうかを検討し、それによって、社会化過程で使用される慣用化された表現が両社会に認められる協調行動における配慮とのかかわりを確認する。

従来、コミュニケーションや人間関係の良好な維持のための規範を明らかにする手段として、コミュニケーション行動評価概念を

用いた研究がある。しかし、このような概念は、必ずしも特定のコミュニケーション場面と結びついているわけではない。特定の具体的な場面と結びつけて使用されるコミュニケーション行動制御慣用表現は、使用場面が特定できるので、その使用条件との関連が詳細に規定できる。そのため、日独で対応する場面どうしで慣用表現を比較できるわけである。このように、場面を取り込むという動的な側面に着目した研究という点に、本研究の独自性がある。

4. 研究成果

本研究の中心的な作業は、日本とドイツにおいて実施するアンケート調査によって日独のコミュニケーション行動制御慣用表現を収集し、それを分析することにあつた。まず、適切に対応するコミュニケーション行動制御慣用表現を収集するための枠組み作りと質問内容を考える準備作業として、育児やしつけに関する図書、小説、戯曲、ドラマなどで、どのようなコミュニケーション行動制御慣用表現が使用されているのか調べ、また、身近にいる子育て中の日本人やドイツ人に子供に対してどのような表現を日常的に使用しているか尋ねてみた。その結果、当初の予想どおり、日独の対応する場面で発せられるコミュニケーション行動制御慣用表現に関して表現形成の際の視点の違いがあるらしいことがわかった。すなわち、日本語では話し手が聞き手への共感に基づいて表現形成を行なう傾向にあるが、ドイツ語では話し手と聞き手との間の対立を基に表現が形成される傾向にあることの予測をたてることができた。たとえば、公園から通りに出ようとしている子どもに対して、日本では「危ない！」と言うことが多いが、ドイツでは“Vorsicht!”や“Halt!”という表現を用いる傾向にある。前者は状況内視点から危険な状

況を叙述する表現であるが、後者は状況外視点から聞き手への指示という形式で言語化された発話である。この成果の一部を論文にまとめ、まず、2009年と2010年に開催された国際学会で口頭発表し（学会発表⑬⑭）、その後、学会の機関誌に投稿し、掲載された（学術論文 [5] [4]）。さらに、成果の別の一部を2010年10月に東京で開催された日独社会科学学会でも口頭発表し（学会発表⑦）、学会が発行する論文集に投稿してある（現在論文集として刊行に向けた編集作業中）。

日本およびドイツで実施したアンケート調査の分析結果については、たしかに予備調査の傾向を肯定するものであった。すなわち、日本語表現は聞き手や他者への共感に基づき、聞き手や他者に対して心理的距離を近づけようとする内容をもつ傾向にあるが、ドイツ語表現は聞き手との対立を基礎に、聞き手に対して物理的に積極的な行動をとるようにしむける内容が傾向的に認められた。このように、より詳細に発話を比較分析すると、日本とドイツの対応する場面であっても、それぞれの社会で期待される行動の構成要素が異なりうることが明らかになった。こういった調査結果を研究期間最終年度の2011年3月開催の国際学会で公表するはずだったが、東日本大震災および原発事故により、学会出張を断念せざるをなくなった。発表するはずだった成果は、翌年2012年に開催された同じ国際学会で発表し（学会発表②）、学会の論文集に投稿済みである（2012年5月の時点で査読審査中）。アンケート調査によって確認できた表現形成の視点の違いとは別に、分析結果が示唆している、日独で期待される言語行動の構成要素の違いについては、2012年6月に台湾で開催される国際学会で口頭発表することが決まっている（学会発表①）。発表内容はその後、論文として機関誌に投稿す

る予定である。

すでに述べたように、本研究では、アンケート調査を実施するための枠組み作りのために、育児書、実用書、文芸作品、ドラマ、公共機関など、日常的な場面で言及もしくは使用されるさまざまな慣用表現を集めてみたが、その際、副次的につぎの3種の興味深い決まり文句に気付いた。(1) 日本語ではたとえば依頼文で「お忙しいところ恐れ入りますが、…」といった表現を付加する習慣があるが、これに対応するドイツ語表現はない。この背景には「労働」や「忙しさ」に関する理解が日独で異なっているのではないかと仮定し、辞書記述に基づいた対比を行い、その成果の一部を学会で発表し（学会発表⑭）、論文にまとめた（学術論文[8] [7]）。(2) また、公共の場面で見かける案内版などの慣用化された表現（たとえば、階段近くにみられる「足元注意」と“Vorsicht! Stufe”やバス内の「つぎとまります」と“Wagen hält”など）についても、日独間に本研究で明らかにされた表現形成の視点の差が認められた。その一部は国内の学会で発表した（③）。このテーマで2011年度科学研究費補助金を申請したところ、採択され、継続的に研究する基盤が得られた。(3) さらに、二人称代名詞を主語とし話法の助動詞 *wollen* を用いた形式により、対話相手の思考内容を断定的に表現する発話が文芸作品内会話で確認された。これについても口頭発表（学会発表⑩⑨⑥）し、その一部は論文として刊行され（学術論文[2]）、別の一部は機関誌に投稿・審査中である。また、その論考を含む論文集も編集した（図書）。また、日本語とドイツ語の対照研究ではないが、研究期間中、客員研究員の陶琳氏との共同研究としてコミュニケーション行動評価概念の日中比較調査に協力し、その成果を学会で発表し（⑫⑧⑤④）、論文にまとめて

ある ([6] [3] [1])。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- [1] 陶琳・尹秀美・西嶋義憲「コミュニケーション行動評価概念の日中韓露比較—大学生に対する調査に基づいて」. In: 語彙研究会『語彙研究』第 9 号, 2011, pp. 103-111. [査読有]
- [2] 西嶋義憲「「お見通し」発言のレトリック：カフカの長編三作の分析」日本文体論学会『文体論研究』第 57 号, 2011, 23-35. [査読有]
- [3] 西嶋義憲・陶琳「コミュニケーション行動の日中比較—電話によるコミュニケーションの場合」語彙研究会『語彙研究』第 8 号, 2010, pp. 32-44. [査読有]
- [4] 西嶋義憲「『危ない!』と“Vorsicht!”—表現形成における視点の違い—」. In: 『金沢大学経済論集』, 30(2), 2010, pp. 201-211. [査読無]
- [5] Nishijima, Yoshinori “Perspectives in Routine Formulas: A Contrastive Analysis of Japanese and German.” In: *Intercultural Communication Studies (ICS)*, 19 (2), 2010, pp. 55-63. [査読有]
- [6] 西嶋義憲・陶琳「コミュニケーション行動評価概念の日中比較—大学生に対する調査に基づいて—」. In: 語彙研究会『語彙研究』第 7 号, 2009, pp. 66-78. [査読有]
- [7] 西嶋義憲「労働関連語彙の日独比較—語彙意味論の観点から—」. In: 『金沢大学経済論集』第 29 巻第 2 号, 2009, pp. 213-232. [査読無]
- [8] Nishijima, Yoshinori “Concepts of Labour-Related Words in German and Japanese: Comparing Lexical Semantics”. In: György Széll & Ute Széll (eds.): *Quality of Life and Working Life in Comparison*. Frankfurt/M. etc.: Peter Lang, 2009, pp. 151-164. [査読有]

[学会発表] (計 15 件)

- ① Nishijima, Yoshinori: “Difference in Perspective: A Contrastive Study of Controlling Routine Formulas for Communicative Behavior in Japanese and German”. Paper presented at The 18th Annual Conference of International

Intercultural Association for Intercultural Communication Studies, Yuan Zi University, Taipei, Taiwan, 10. June, 2012 (on the program).

- ② Nishijima, Yoshinori: “Different Perspectives: A Contrastive Analysis of Functionally Equivalent Routine Formulas for Communicative Behavior in Japanese and German”. Paper presented at the 2nd Meeting of Meaning, Context & Cognition, University of Lodz, Lodz, Poland, 23. March, 2012.
- ③ 西嶋義憲「「うるさい!」と“Ruhe!”: コミュニケーション行動制御慣用表現の日独対照研究の試み」日本独文学会中国四国支部第 60 回大会, 高知大学, 高知, 2011 年 11 月 5 日.
- ④ 西嶋義憲・陶琳・尹秀美「コミュニケーション行動評価概念の日中韓露比較」語彙研究会第 9 回大会, 愛知学院大学, 名古屋, 2011 年 9 月 3 日.
- ⑤ 陶琳・尹秀美・西嶋義憲「日中韓のコミュニケーション行動評価概念の比較—大学生に対する調査に基づいて—」言語学会第 13 回年次国際大会 (JLS2011), 関西大学, 吹田, 2011 年 6 月 25 日.
- ⑥ 西嶋義憲「「お見通し」発言と翻訳—レトリックの翻訳可能性—」日本文体論学会第 99 回大会, 日本大学, 東京, 2011 年 6 月 19 日.
- ⑦ Nishijima, Yoshinori: “*Urusai!* and *Ruhe!*: A Contrastive Analysis of Routine Formulas in Japanese and German”. Paper presented at the 11th Meeting of German-Japanese Society for Social Sciences, Hosei University, Tokyo, Japan, 9. October, 2010.
- ⑧ 陶琳・西嶋義憲「コミュニケーション行動評価概念の日中比較—電話によるコミュニケーションの場合—」語彙研究会第 8 回大会, 愛知学院大学, 名古屋, 2010 年 9 月 4 日.
- ⑨ Nishijima, Yoshinori: “Seeing-Through Utterances in the Work of Franz Kafka”. Paper presented at the 3rd Annual International Conference on Philology, Literature and Linguistics, Athens Institute for Education and Research, Athens, Greece, 12. July, 2010.
- ⑩ 西嶋義憲「カフカと「お見通し」発言—その多機能性について—」日本文体

論学会第 97 回大会, 聖徳大学, 松戸,
2010 年 6 月 26 日.

- ⑪ Nishijima, Yoshinori: “Communicative Perspectives in Japanese and German: A Contrastive Analysis of Evaluating Concepts of Communicative Behavior” Paper presented at The 16th Annual Conference of International Intercultural Association for Intercultural Communication Studies, Hotel Canton, Guangzhou, China, 20. June, 2010.
- ⑫ 西嶋義憲・陶琳「コミュニケーション行動評価概念の日中比較—大学生対象のアンケート調査に基づいて—」第 7 回語彙研究会大会, 学習院大学, 東京, 2009 年 9 月 5 日.
- ⑬ Nishijima, Yoshinori: “Routine Formulas: A Contrastive Analysis of Japanese and German.” Paper presented at The 15th Annual Conference of International Intercultural Association for Intercultural Communication Studies, Kumamoto Gakuen University, Kumamoto, Japan, 19. September, 2009.
- ⑭ Nishijima, Yoshinori: “A Comparison of the Concepts of *Arbeit* and *Rodo* (「労働」) —From a Point of View of Lexical Semantics”. Paper presented at the 10th Meeting of German-Japanese Society for Social Sciences, Volkshochschule Osnabrück, Osnabrück, Germany, 29. August, 2008.

[図書] (計 1 件)

古川昌文・西嶋義憲編『カフカ中期作品論集』東京: 同学社, 2011 年 7 月, 総 397 頁 (pp. 44 - 65; pp. 137 - 164) .

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西嶋 義憲 (NISHIJIMA YOSHINORI)
金沢大学・経済学経営学系・教授
研究者番号: 20242539